

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 高等学校学習指導要領では、外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにすることを目標としていることを踏まえて、4技能のうち「読むこと」「聞くこと」の中でこれらの知識が活用できるかを評価する。したがって、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しないこととする。
- 「リーディング」「リスニング」とともに、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、各CEFRレベルにふさわしいテキスト作成と設問設定を行うことで、A1 からB1レベルに相当する問題を作成する。また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 「リーディング」については、様々なテキストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問うことをねらいとする。
- 「リスニング」については、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問うことをねらいとする。音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。

読み上げ回数については、英語の試行調査の結果や資格・検定試験におけるリスニング試験の一般的な在り方を踏まえ、問題の数の充実を図ることによりテストの信頼性が更に向上することを目的として、1回読みを含める。十分な読み上げ時間を確保し、重要な情報は形を変えて複数回言及するなど、自然なコミュニケーションに近い英語の問題を含めて検討する。全ての問題を1回読みにする可能性についても今後検証しつつ、当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。
- グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で高等学校学習指導要領に示す4技能のバランスの良い育成が求められていることを踏まえ、「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする。ただし、各大学の入学者選抜において、具体的にどの技能にどの程度の比重を置くかについては、4技能を総合的に評価するよう努めるという「大学入学共通テスト実施方針」（平成29年7月）を踏まえた各大学の判断となる。

2 各問題の出題意図と解答結果

- ・第1問は、英語の特徴やきまりに関する知識・技能（特に文構造及び文法事項）に基づき、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い発話を聞いて、必要な情報や、発話内容の概要や要点を把握する力を問う。日常的な内容の文を聞いて、内容が合っている選択肢（セクションAでは文、セクションBではイラスト）を選ぶ問題である。

本大問で問われている「必要な情報や、発話内容の概要や重点を把握する力」については多くの受験者が身に付けていると考えられる。しかしながら、問2にあるDo you mind …?という表現の個別の語彙は聞き取れていても、1つの表現として解釈ができていない可能性がある。また、問3においても、I have to get on the train right now.に含まれる話者の意図を正しく解釈できず、言い換えられた選択肢から正解を導くための実践的な文法力において弱い傾向が見てとれた。
- ・第2問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報とイラストを参考にしながら聞き取ることを通じて、必要な情報を把握する力を問う。日常的な短い対話を聞

いて、設問に対する答えをイラストから選ぶ問題である。

多くの受験者は、文脈が与えられ、対話の中で必要な情報が分散して示されていること、また選択肢がイラストであることを十分に利用しているようである。ただし、問10については、代名詞theseやthisが何を示しているのかといった基本的な文法な知識が、実際の場面でどのように用いられるかについての知識でやや弱いと考えられる。

- ・第3問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報を参考にしながら聞き取ることを通じて、概要や要点を目的に応じて把握する力を問う。日常的な対話を聞いて、対話内容に関する設問の答えとなる選択肢を選ぶ問題である。対話は言語の機能（例：依頼、誘い、感謝等）を軸に作られており、小問6題のうち、今回は問14と問15をイギリス英語による発音とした。

本大問で問われている「概要や要点を目的に応じて把握すること」ができていない受験者は多い。しかし、問13や問16では、複数の可能性の中から、最終的にどのようになったかを判断する力が問われたが、可能性を絞り込んで行く過程を難しく感じた受験者が多かったようである。

- ・第4問Aは、必要な情報を聞き取り、図表を完成させたり、分類や並べ替えをしたりすることを通じて、話し手の意図を把握する力を問う。ここでは、スケジュールを聞き、スケジュールの順に図を並べ替える設問と、食品フェアでどの場所に何がおいてあるかの説明を聞き、メモを完成させる設問から成る。

本問題のようなスケジュールが途中で変更になったり、図の順序を途中で入れ替える必要があったりといった情報の修正となると、難しく感じる受験者が多いと考えられる。

第4問Bは、複数の情報を聞き、最も条件に合う選択肢の一つ選ぶことを通じて、状況・条件に基づき比較して判断する力を問う。ここでは、美術館での館内ツアーについての説明を聞き、最も希望に合うツアーの一つを決める。4人の話者のうち、一人はイギリス英語、一人は日本語母語話者による英語の発音とした。

本問題では、美術館にかかわる語彙が用いられ、母語の異なる話者が英語である程度の情報をまとめて話すなどしたが、受験者は事前の与えられた情報を利用したり、メモ欄を活用して、しっかりと対応したと考えられる。

- ・第5問は、身近な話題や知識のある社会的な話題に関する講義を聞き、メモを取ることを通じて概要や要点を捉える力や、聞き取った情報と図表から読み取れる情報を組み合わせて判断する力を問う。ここでは、蜂蜜についての講義を聞く。講義を聞いて、内容理解・情報整理・論点把握をし、更に講義内容と図表情報の統合をすることが求められている。

問28～29、問33で出題された、複数の情報を統合し、整理する力は、本大問で中心的に問うている点であるが、その点が弱いように思われた。

- ・第6問Aは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、話者の発話の要点を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理し、判断する力を問う。ここでは、子供にどの楽器を習わせるかについて意見交換をする二人の会話を聞いて、会話の趣旨を判断する。

ある程度の長さを持った議論ではあるが、想像しやすい内容であったためか、多くの受験者は、情報把握や要点整理が十分にできたと思われる。

第6問Bは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、それぞれの話者の立場を判断し、意見を支持する図表を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理、判断する力を問う。ここでは、4人の学生が電子書籍と紙の書籍のどちらが良いかについて意見交換している様子を聞き、話者の立場を判断する。

本大問では話し手が多く、また、議論の中でそれぞれの立場を捉えるという負荷の高い問題ではあったが、書籍についての話題が受験者に馴染みがあったことに加え、4人の話者の区別がつきやすかったため、それぞれの話者の意見をしっかりと理解できた受験者が多かったと考えられる。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

本テストについて、教育研究団体からは、昨年度の課題を改善しつつ、「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する」という共通テストの問題作成方針が色濃く反映されたものであり、「出題教科・科目において問いたい思考力、判断力、表現力等を明確にした上で問題を作成する」という方向性が明らかであるという意見が示された。そしてこういった傾向は望ましく、教育現場での授業改善にも確実に繋がっていくものである点が評価された。

また、高等学校教科担当教員からは、出題内容・範囲、問題の分量・程度、及び表現・形式についておおむね適切であったとの総評と併せて、本テストの特徴として、読まれた内容を構成するパーツとしての単語や表現をよりどころとして正解を選ぶタイプの出題ではなく、与えられた状況や場面において発せられた内容全体から話者の意図や要点を見極めて情報を整理し正解を選ぶ、思考力・判断力・表現力等を問う出題が多いことが挙げられた。

一方で、出題に関して幾つかの指摘もあったが、以下に主な意見とそれに対する問題作成部会としての見解を述べる。

- ・第1問については、短い発話であるため、やや唐突に始まる印象があるとの指摘を受けた。これについては本テストを通じて、なるべく難易度の低い小問から徐々に難易度が上がっていくよう工夫をしているが、今後なるべく場面や状況を把握しやすい設定の内容から初め、徐々に英語に耳を慣らしていける流れを作る方針を継続したい。
- ・第2問については、イラストやピクトグラムを分かりやすいものとするよう、引き続き配慮して欲しいとの意見があり、この点については今後も慎重に取り組みたい。
- ・第3問については、初回であった昨年度は、アメリカ英語でのやりとりが続いている中で、唐突にイギリス英語の会話が始まることに対して受験者に戸惑いが生じる可能性があることが指摘されたが、本年度を含め受験者がこの形式に慣れてきたという指摘もあり、イギリス英語の出題であることを無理に日本語で設定するよりも、受験者が取り組みやすいより自然な状況設定に注力することとしたい。
- ・第4問～第6問については、聴いた内容から設問に取り組む時間はやや短いとの指摘を受けた。この点については、30分という限られた試験時間内に、いかに多くの設問を含めて信頼性を上げつつ、問題の状況設定や解答に求められている情報を明確に示すか、バランスを意識して問題作成を続けたい。

第5問では受験者の背景知識の有無により理解内容に差が出ないように、との指摘を受けた。関連して、馴染みがそれほどない話題である場合には、より具体的な例を導入段階で示し、全体の理解を促進する、との提案を受けた。いかなるテーマを選択しても、必ず背景知識の量には個人差があるが、背景知識があってもきちんと聞かないと解けない問題と、背景知識がなくてもそれを補う工夫をした問題の作成を今後も目指すこととする。

この他、読み上げ回数については、日常的な会話については2回読まれているものを1回にし、講義などの長いものを聞き、複数の情報を統合する形式の問題では、1回読まれているものを2回とする提案があった一方で、試験前半における2回読みについては、受験者の負担を考慮するとなされるべき配慮と捉えることもできる、との意見もあった。また、英語変種の導入に関しては、国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態を反映しており、大変良い傾向であると評価された。

4 ま と め

共通テストが高等学校の授業改善へ及ぼす影響については、高等学校教科担当教員からも示された。英語をコミュニケーションのツールとして使う場合を想定し、生徒自らがそれを体験するような授業設計や指導の在り方を追求すべきであるとの見解は、まさに問題作成部会の意図したことと一致する。

また、教育研究団体からの指摘のとおり、思考力・判断力・表現力等を問うことが目的でありながら、情報処理能力や、それを速く行うことだけを求めるような問題設定となってしまうことは避けるべきであるが、一方で実際のコミュニケーションの場で求められる即時的な対応力は、聴解における基礎力として位置付けるべきであると考え。受験者に過度の負担を与えることは避けつつ、聞き取ったことを瞬時に「理解・解釈」できるリスニングの流暢性を高める学習にも是非力を入れてほしい。共通テストが今後も、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」につながる波及効果があるものとなるよう心したい。